

王の間はんとするところは沙門に現在の果報があるかどうかといふことであつた。彼はそれについて諸の外道の師にたづねたところ瓜を問へば李を報じ、李を問へば瓜を報ずるがごとくにしてすこしも彼を満足させなかつたことを語つたのち佛陀に問うていつた。

「世尊よ、世人の生の營みにはみな現に果報があります。彼らはそれによつてみづから命をつなぎ、娛樂を恣にするのみならず、父母、妻子、奴僕たちまでもともに樂むことができます。今沙門の現在の修道にも同様に現在の果報があるのでありませうか」

佛陀は王に告げていつた。

「私がひとつ王にたづねよう。このやうな満月の夜に王が髪をあらひ、澡浴をして、高殿のうへでもろくの姝女とともに娛むのを王の下部が見たならば、彼はかう思ふであらう。「王はなんの果報でかやうな幸福を得たのであらう」と。然るに彼が後に鬚髪を剃りおとし、三法衣を服し、出家修道して平等の法を行したとせよ。王はその者のくるのを見て「これはわが下部である」といふであらうか」

王は答へていつた。

「否、世尊よ、さやうの時には私はその人を起ち迎へ、座に請じて禮敬するでありませう。」

佛陀はいつた。

「王よ、それは即ち沙門現在の果報ではないか」

「また次に王よ、如來の法に入つて精勤專念不放逸なる者は諸の闇冥を滅して大智明を生ずる。所謂宿住智證明、死生智證明、漏盡智證明である。いかに王よ、これは沙門現在の果報ではないか」

その時阿闍多設咄路は座より起ち佛足を頂禮して佛陀にむかつていつた。

「世尊よ、願くは私の悔過をお受けください。私は五欲に迷つて父を殺しました。世尊よ、憐みを垂れて私の悔過をお受けください。」

佛陀は王に告げていつた。

「お前は愚にして父を殺した。併しながら今お前は自ら罪を悔いてゐる。私はお前を慍むがゆゑに

お前の悔過を受ける」

佛陀はなほ王のために法を説いた。王は教へをきゝをはり佛陀を拜していつた。

「世尊よ、我今佛陀に歸依し奉る。法に歸依し奉る。僧に歸依し奉る。願くは今より後終生優婆塞とならんことを」

彼はまた翌日佛陀及び比丘衆に飲食を供養せんことを請うた。佛陀は黙然として請を受けた。

阿闍多設咄路はかやうにして佛陀に歸依した。彼を苦めたところの矛盾は佛陀の教誡によつてすこしも解かれはしなかつた。たゞその矛盾をそのままに彼をして人の子の常道にかへらせたものは佛陀の偉大なる人格の力であつた。

二十七

提婆達多は阿闍多設咄路の歸佛を知らなかつた。彼は違和を感じてゐた。彼は三閻達多等腹心の弟子たちのなんとなく惱しげな様子を見てそれを己の疾患のためと思ひ、彼らにむかつて折々慰藉の言葉を與へたりした。併し事實はさうではなかつた。阿闍多設咄路の歸佛以來提婆達多及びその教團の評判は益悪く、弟子も俗信徒も漸く離散してゆくのであつた。弟子たちは日々の行乞を無事に何かの不都合なしにすることができなくなつた。當時にあつても今日のごとく、なんの思慮もなく他人の尾についてむやみに吠えたりすることを好む野犬にひとしい人間の多數があつた。その中には嘗て提婆達多の最も篤い歸依者であつたものもまじつてゐた。彼らは往日提婆達多が自分達にあびせた熱罵を思ひおこして今更のやうに憤懣し、相手の弱りめにつけこんで散々に漫罵を放つのであつた。提婆達多はそれを夢にも知らなかつた。弟子たちはそれを彼の耳に入れなかつた。幾日かのうち彼はいかほどか輕快をおぼえたので起きて行乞に出ようとした。弟子たちは彼の健康を氣づかふといふ口實のもとに彼をひきとめようとした。彼はきかず三閻達多を従へて伽耶の市に行乞した。形勢は初から面白くなかつた。彼は己の後に惡意的な私語や譏笑をきくやうな氣がした。

彼は戸毎に食を乞うて歩いたけれども彼の鉢はこれまでのやうに供養されなかつた。彼はそれを訝り、また不満に思つた。とはいへ彼は生來の驕傲と國王の師たる矜恃とをもつて昂然として行乞をつゞけた。彼はとある市場のごた／＼した四辻を横ぎらねばならなかつた。そこには蛇つかひがべちやくちやと口上を述べながら自分の頸や腹にぬら／＼と蛇をまきつけてゐた。そのまはりにはその邊の女子供が黒山になつて見物してゐた。彼がそこを通りぬけようとした時に牛の背から荷をおろしてゐた商人體の男が彼を見つけてわめいた。

「そら提婆達多様のお通りだぞ。お弟子はなくなる、王様には見はなされる、尊者様も浮ばれめえてや」

提婆達多は愕然として顧みた。その時顔ちゆう瘰のある剽輕者が彼のまへへ出て彼にむかつて唇をつきだしながらわる鄭寧に禮拜していつた。

「わからねえ奴らでがす。勘辨してやつとくんせえ」

くす／＼と笑ひ聲がした。大勢の嘲笑的な眼が彼の顔にあつまつた。彼はかつとした。そして詰るやうになにかいはうとしたが終にひと言もいはずにたちさつた。聞くに堪へぬ出まかせの惡對をあびせかけられながら。

二十八

提婆達多は伽耶尸利沙の精舎へ歸つた。そしてその時まで口をつぐんでゐた三閩達多からはじめて阿闍多設咄路の歸佛の次第をきいた。

「阿闍多設咄路までが退轉したか。」

彼はそのほか何もいはなかつた。その日彼は食事をとらなかつた。そして夕刻から高い熱を發した。弟子たちは彼を草庵のなかにねかした。彼は看護の三閩達多等をも退けてひとり思ひに沈んでゐた。彼はくりかへし／＼今朝の出來事を考へた。それは腦髓に烙鐵をあてるやうであつた。彼は呪ひ且つ呪つた。それでもなほ飽きたらなかつた。そのうへ阿闍多設咄路の歸佛は彼にとつて致命的のものであつた。彼は泣喪した。茫然自失した。彼は年來の仇敵悉達多を讚嘆する阿闍多設咄路の美しい聲を想像した。またその掌の柔さを。そして悉達多があの高慢な様子をして——彼はさう思つた——王の崇敬をうけ、彼を罵つて退轉者と呼ぶところを。彼は高熱と瞋恚に悶えながら一夜をあかした。彼は阿闍多設咄路の心をひきもどすべく曷羅闍姑利囀へ行かうと決心した。彼は八つ裂きになる思ひをしながら夜の明けのを待つた。生憎翌日から彼の容態は一層悪くなつた。彼はど

うしても身を起すことができなかつた。そして熱にうかされて時々譫語をいつた。彼は胸痛をおぼえ、咯痰にはづかに血液がまじつてゐるのを見出した。彼は愈死期がせまつたと思つた。常に忘れず、そして絶えず恐れてゐた死！ 死は何物も抗拒しがたい力をもつてちり／＼と目前に押し寄せてきた。死！ 彼はたゞそれだけを思つた。そして悲みも恐れも通りこした一種名状しがたい絶望無力の状態に陥つて已に死んだものゝやうに僧伽梨のうへに横つてゐた。これまで彼が如實に見てゐると信じたところの死はいはゞ死の幻影にすぎなかつた。今にしてはじめて彼は眞の死の姿と、力と、それに向ひ立つところの己を知つた。彼はもはや生きたいといふ張りさへもなかつた。

さうかと思へばまたすこしく病勢の衰へた時など、不覺にも今一度命をとりとめるのではないかと疑ふ氣持ちになることがあつた。と同時に生命に對する執着が狂氣のやうに起つた。生きたい。生きたい。生きたい。この時もし彼になほ幾年の命を約束するものならば、彼は佛陀の足をも頂禮したであらう。否、佛陀は衆生にむかつて「涅槃」を約束したけれども、それは今提婆達多が渴望するところのはかなき生命ではなかつた。

彼はまた牛蝨のやうに腦裡にくひいつた過去の記憶をひとつ／＼ひきだしてみた。××城の王子たりし幼時、華やかなりし青春の時、酒、女、賭博、遊戯、狩獵、その十にひとつも再びすることが

できたならば！

彼はまた舍利弗や、目犍連夜那や、諸の阿羅漢たちの淨く靜なる生活を心から羨んだ。實に佛陀をさへも。加之彼はこの期に及んで佛陀との最後の和解を望まなかつたであらうか。併しながらこれらはいはゞみな走馬燈の周圍に畫かれて目まぐるしく廻つてゆく様々の像にすぎなかつた。それらはくりかへし現れるけれどもひとつとしてしばらくもとどまるものはなかつた。

それにひきかへてその走馬燈の中心の燈火ともいふべき不動な力強いひとつのものがあつた。それは佛陀に對する復讐の念であつた。提婆達多が絶望的假死の状態よりさめた時にいたくも彼を苦めるのはこれであつた。己があらゆるものを犠牲にして執拗にたくらんだ復讐をしとげることなしに、みずく敵をして佛陀の名聲と利養とを樂ましめつゝ無念に死んでゆく自分をよそめに見ながら、悉達多は己を棄て去りたる阿闍多設咄路の新なる歸依をうけて得々として勝ちほこつてゐる。提婆達多はそれを思つて恐しい知死期の嫉妬を燃した。彼は己の嫉妬が不條理だと知れば知るほど相手が憎かつた。彼は幾十年來惡戰苦闘をつゞけた内外の強敵——惡念と佛陀と——のいづれにも全くうち敗られてしまつた。彼の渴愛する凡てが彼を見棄て、今や命までが彼を見棄てんとしてゐるこの絶體絶命の時にあたつて、提婆達多が戀うてやまぬところのものは耶輸陀羅であつた。

「耶輸陀羅よ、耶輸陀羅よ」

彼女と別れてより己に三十年が過ぎた。幻に浮ぶのはまだ花羞しい彼女の姿であつた。彼は彼女との戀のもと末を細々と思ひかへした。そしてかの最後の夜に思ひいたつてさめくくと泣いた。別

れようとした時に彼女はうしろから呼びとめて彼の頸にすがりついて泣いた。彼女は自分が身心ともに彼に弄ばれたことを彼自らの口からきいたその最後の時に於てさへも彼を愛してかはらなかつた。

「耶輸陀羅よ、卿は私をおいて何處へ行つた」

彼は彼女が何處へ行つたかを知らない。はた己が何處へ行くかをも知らない。

かゝる苦惱のうちに彼の命は燈火の明滅するが如くにしてやうやく終りに近づいてきた。彼は愈決心した。

「私は決して悉達多にひとり勝利者の日を樂ましはせぬ」

夜、彼は三開達多に鬚髮を剃らせたのち、僅に残る弟子たちを集めて最後の別れを告げ、彼らがこれまで彼にさゝげた誠實と勤勞とを謝した。そしてをはりに彼はいつた。

「私は悉達多に告別のため明日早曉曷羅闍姑利咽へ行く。輜の用意をしておくやうに」

皆は顔を見あはせた。併し誰も彼をとめなかつた。安居は明日をもつて終る。提婆達多は佛陀が遊行に出てしまふことをおそれた。夜半、恐しい風が山から吹きおろして彼の草庵をゆすつた。雨が隙間を漏つてしとどに床を濡した。彼はまつたく眠らなかつた。明け方風雨がやんだ。輜が草庵のまへ

へ運ばれた。天はまだ暗い。晴れかゝつた雲のきれめに星が淡く光つてゐる。木も草もぐつしよりと濡れて、空気が冷く重くしめつてゐる。伽耶尸利沙はまだおほかた雲に包まれてゐる。提婆達多は人目をぬすんで手ばやく剃刀を法衣のしたにかくした。彼は三閻達多と瞿利迦にたすけられてからうじて立ちあがつた。そしてうす暗い燭火に照されたみすばらしい部屋——それはこの時までも恐しい火宅であつたところの——に最後の一瞥を與へたのち、踏きながら戸口のはうへ力ない足をはこんだ。輻夫のもつ炬火の光をうけて病みほうけたその顔がまつかに見えた。彼は轎に乗らうとした。

「提婆達多」

提婆達多はよろ／＼とした。そして死人のやうな顔をして何物をか捜すやうに庵室のなかを凝視した。彼は悄然として轎にのせられた。それは忘れもせぬ耶輸陀羅の聲であつた。

三十

菴沒羅園。鉢刺婆刺拏の日。

佛陀は阿難陀を顧みていつた。

「阿難陀、今日は受歳の日である。お前瞿稚を撃て」

阿難陀は瞿稚を撃つて比丘衆を集めた。佛陀も比丘衆も各露地に草座を敷いて坐つた。佛陀は默然として大衆を見わたしたのち、彼らに告げていつた。

「私は今受歳しようと思ふ。私はお前たちに對して過ちをしたことはないか。身口意に於て犯したところはないか」

大衆はしづまりかへつて答へをするものがない。佛陀は餘ろにくりかへした。

「私は今受歳しようと思ふ。私はお前たちに對して過ちをしたことはないか」

「……………」

佛陀は更にいま一度くりかへした。その時舍利弗は座より起ち佛陀のまへに長跪叉手していつた。

「諸の比丘衆は世尊に身口意の過ちのないことを觀察します。世尊は今日度せざる者は度し、脱せ

ざる者は脱せしめ、般洵槃せざる者は般洵槃せしめ、救護なき者のためには救護となり、盲者のためには眼目となり、病者のためには大醫王となり、三界の獨尊にして能く及ぶ者なき最上尊であります。私達は世尊に於ていさゝかの過ちをも見出すことはできません。

私は今世尊に申し上げます。私は世尊及び比丘僧に對して過ちがなかつたではありませんか？
佛陀は舍利弗に告げていふ。

「舍利弗よ、お前はすべて身口意の所作に於て過ちがない。お前は持戒多聞、少欲知足、煩惱を遠ざけて正念に住してゐる。お前は智慧最勝にして衆のために法を説いて倦むことを知らない。恰も轉輪聖王の太子が王位を紹ぐごとく、私にかはつて法輪を轉ずるお前はまことに私の長子である。私はお前の身口意の三業に於てすこしも過ちを見出さない」

舍利弗はまた佛陀にむかつていつた。

「これらの千二百五十人の比丘は皆今受戒しようとしてをります。これらの比丘たちは皆世尊に對して過ちがなかつたではありませんか？」

佛陀は若干の者を除いてその他の多くの比丘衆を賞讃した。

その時一人の尊者は佛陀のまへにすゝみ、佛足を頂禮してのち、佛陀の許しを得て偈をもつて佛

陀及び比丘僧を讃嘆した。

淨き十五日

集るもの千二百

煩惱の岸べをはなれ

生死の海もこえぬ

世尊は大導師

如來は大船師

慈悲の御手をのべて

あまねく衆生を度したまふ

千二百五十人

みなこれ眞佛子

よく愛欲の刺を断ち
みづから歸命し奉る

三三

三十一

提婆達多は曷羅闍姑利囀にむけ伽耶尸利沙の精舎をたつた。彼はあせりにあせつたけれども道は遠く日は暑かつた。それよりも彼の容態は一層悪かつた。三閻達多等四人の弟子は半途にしてなかに意識を失つてゐる彼をとある林中に憩はせた。そしてそこに一宿することにした。その夜は美しく静な夜であつた。提婆達多は極度の衰弱と疲勞と高熱のために一夜をうとくと眠つた。翌日早曉彼はそこを發足した。曷羅闍姑利囀に近づく頃には日は酷烈に照りつけた。大地は赤鷄のごとくにみえた。彼は病軀を長途輻に揺られて堪へがたい苦惱に呻吟しつゝからうじて城外の菴沒羅園についた。それはちやうど自恣の終らうとするところであつた。彼は精舎のそばにある池のほとりに立つた畢波羅樹の蔭に輻をおろさせた。そして三閻達多を使ひとして佛陀に彼が最後の告別をなさんがためにきたことを傳へさせた。彼はむら／＼と起る惡念のために急に力づくやうに覺えた。が、三閻達多の戻らぬうちに彼はなんともいへぬ胸苦しさを感じた。彼は水を呼ぼうとしたがすでに遅かつた。彼はひとつふたつ魚さかなのやうに喘いだ。そして苦しい長い一生をへた。

もしそこに我々に救ひがあるならば、提婆達多こそまことに救はれるであらう。提婆達多が救は

三三

れずば、我々の誰が救はれるであらうか。

大正九年四月十七日

私はこの小説をかくのに左にあげる諸書を参考にした。それらのものゝなかには殆どあ
るひは全く私に役立たなかつたものもかなりあつたやうに記憶するが、私がこの小説をほ
ぼ書きあげた頃思ひがけなく起つた出来事に、ひきつゞき半年以上も没頭しなければなら
なかつたゆゑに、あらかた忘れてしまつて、今それらの名をこゝからとり除くことができ
ない。私はまた經からはもとより、經以外の諸書からも譯語、譯文、其他をそのまま借用
したところも多くあつたと思ふ。この本の性質上、さういふ場合一々引用符號をつけな
かつたから、こゝに一括してお断りしておく。

異出菩薩本起經

過去現在因果經

高僧法顯傳

根本説一切有部毘奈耶雜事

根本説一切有部毘奈耶破僧事

根本説一切有部毘奈耶藥事

根本説一切有部毘奈耶出家事

雜寶藏經

雜阿含經
釋迦氏譜
釋迦譜
修行本起經
十二遊經
十誦律
四分律
增一阿含經
大般涅槃經南本
大善權經
太子瑞應本起經
長阿含經
中阿含經
中本起經
方廣大莊嚴經
普曜經

佛本行經
佛說未生冤經
佛說觀無量壽經
佛說衆許摩訶帝經
佛所行讚
佛本行集經
彌沙塞部和醯五分律
印度哲學宗教史
解說西域記
根本佛教
釋迦牟尼傳
佛弟子傳
藝術上の釋迦
オランダンマルク氏佛陀

高橋順次郎氏
木村泰賢氏共著
堀謙德氏著
姉崎正治氏著
井上哲次郎氏
堀謙德氏合著
山邊智學氏著
堀謙德氏編
三並真氏譯

ケルン氏佛教大綱 立花俊道氏譯補
 ビガンデー氏緬甸佛傳 赤沼智善氏譯
 リステキズ氏釋尊之生涯及其教理 赤沼智善氏譯
 リステキズ氏初期佛教 赤沼智善氏譯
 Buddhist India. Blays Davids.
 Early History of India. Smith.
 The Hymns of the Rig Veda. Griffith.
 The Light of Asia. Arnold.
 其他の雜書

送り假名法は書肆の希望に従ふ。
 句讀法も間に合はせのものである。

大正十年四月廿五日印刷
 大正十年五月一日發行

(定價金壹圓貳拾錢)

◀多 體 姿 提▶

發行者

東京市牛込區矢來町三番地

佐藤 義亮

發行所

東京市牛込區矢來町三番地

新潮社

電話番町 九八八
 三九〇
 六九九
 番番番

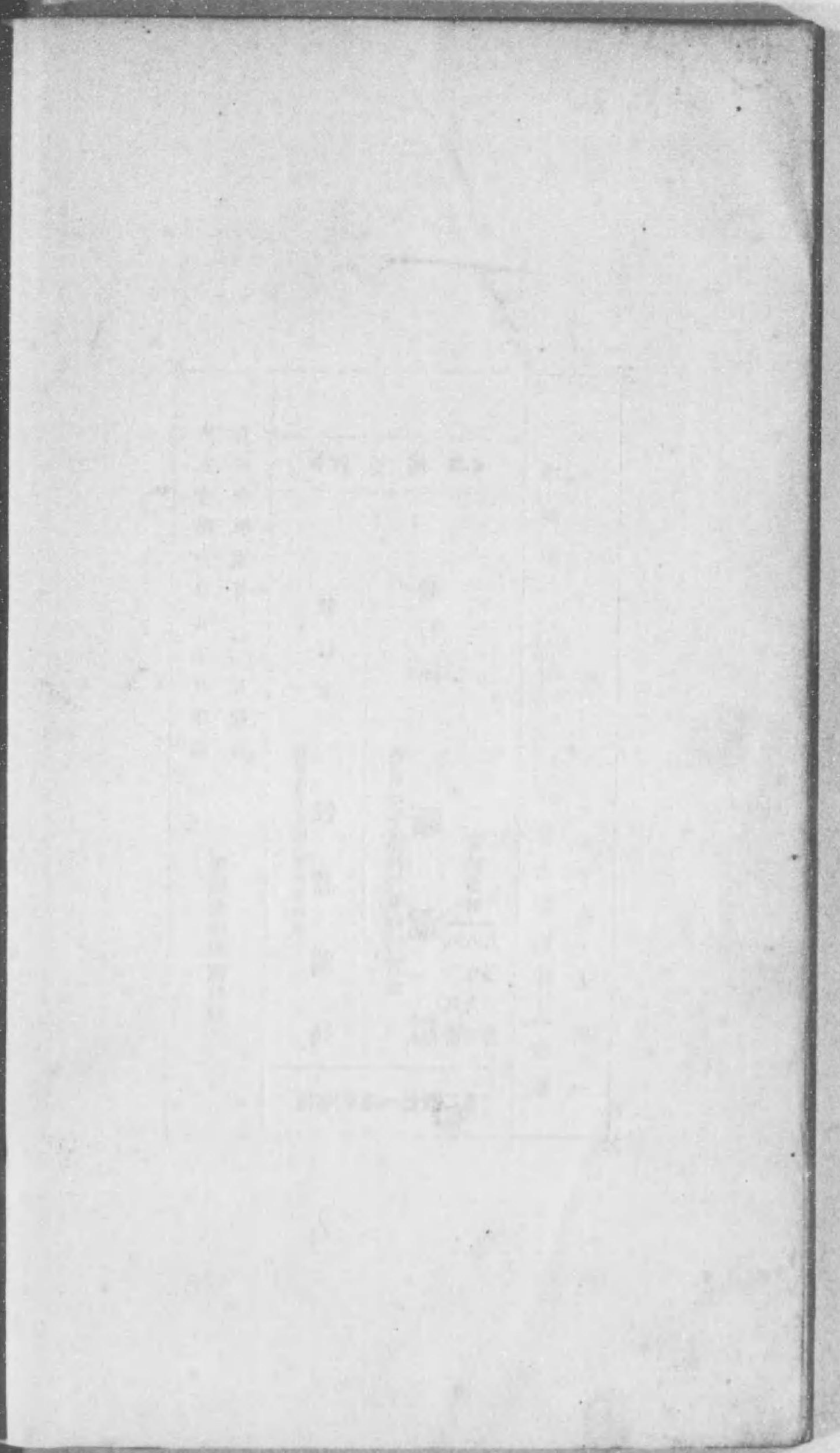
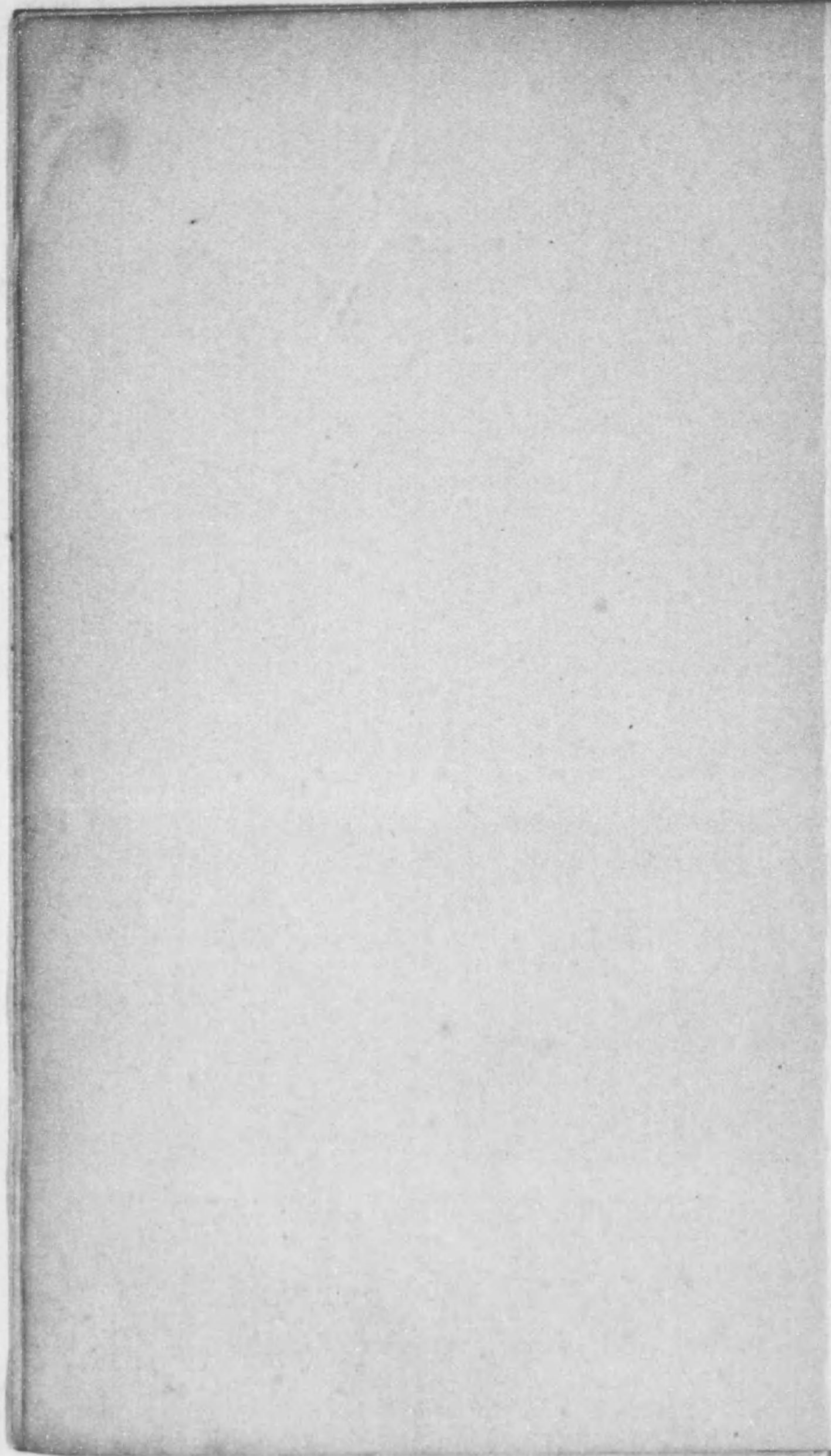
番二四七一(東京)替換

印刷所

東京市小石川區西江戸川町
 電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木 俊一



10.6.25

501

40

終